



[男女共同参画社会の実現をめざす情報誌]

特集

外国からみた

# 日本の社会・日本の家族

OKAYAMA

2000.9

vol. 19

- 国連特別総会 女性2000年会議  
レポート 時實達枝さん
- シリーズ  
さんかく社会のパイオニア Vol.1

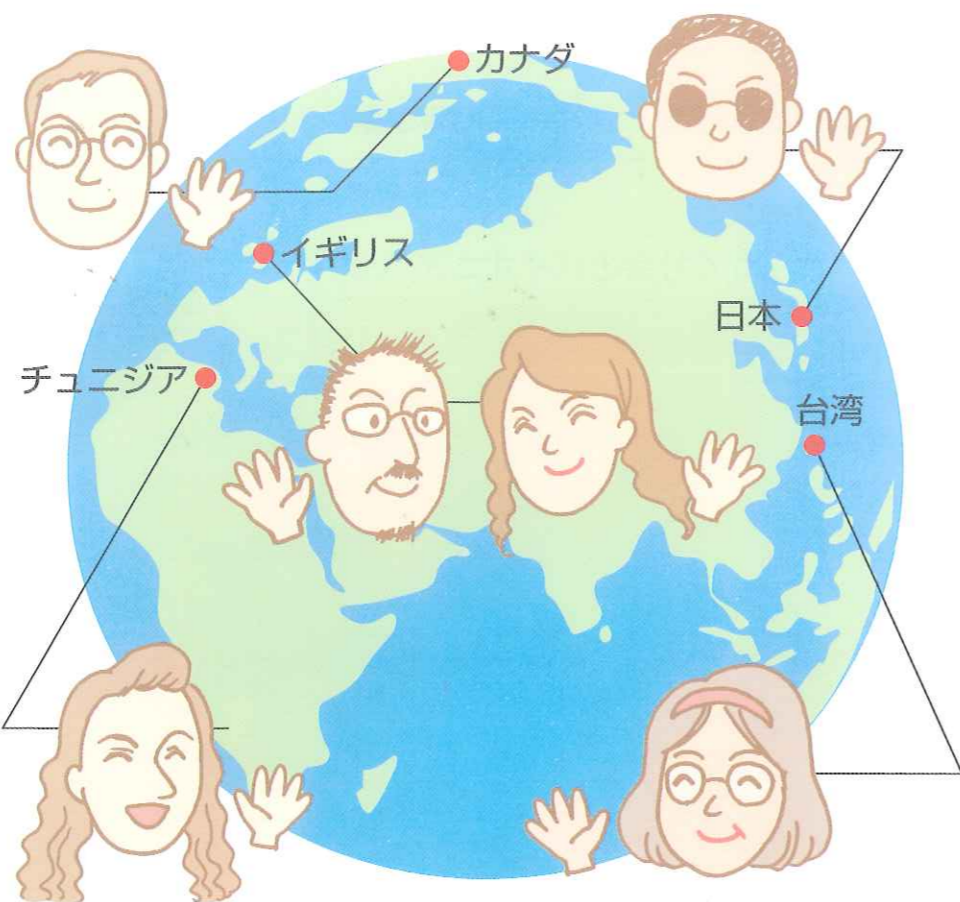
# DUO

[デュオ]



岡山市

# 日本の社会・日本の家族



家庭でも職場でも男性が優位だった日本の社会も、男女平等の意識が深まるにつれて、そのあり方もずいぶん変わってきました。

しかし、日本で暮らす外国の人々から見れば、まだ疑問に感じることがあるようです。

今回DOROでは、岡山に暮らす外国の方と在外の日本人を取材し、男女のあり方についてお話を伺いました。さまざま分野で国際化が叫ばれる中、私たちをもっと広い視野で

男女共同参画社会を見つめ直してみませんか。



リム・デルウイッシュさん(29才)  
チュニジアでは国立の薬学研究所に勤務。1999年4月、夫と子ども(男の子・当時2才)を残して、岡山大学大学院自然科学研究科博士課程に単身留学。今年4月、自身の希望で子どもも来日。現在は、子どもを保育所に預け、育児をしながら研究を続けている。

## 女性の選択肢どうして少ない?

日本の社会を見て疑問に思うことがあるのですが、それは、どうして多くの女性が結婚や出産の後、仕事をやめて家にいることを選ぶのだろうかということです。彼女自身がそうしたいのか、それとも夫の希望なのか、また職場から退職を迫られるのか、どういう理由が多いのでしょうか。研究の分野でも、日本では大学院の修士課程や博士課程まで進む女性がとても少ないように感じています。

それに対して、私の国チュニジアでは、結婚や出産後も仕事を続けることを選ぶ女性が多く、たとえ賃金が多くなっても外で働くことを望みます。出産後も仕事を続けるのはもちろん簡単なことではありません

が、家族の助けを得て、ほとんどの女性が仕事を続けています。

また、日本では、会社の中で男女差別があり、女性が管理職になるのが難しいと聞いていますが、チュニジアでは、職場に身分的な男女差別はなく賃金格差もありません。働く者は皆一人のチュニジア国民として考えられています。もし男女差別が起きたら国民が怒るでしょうし、私の職場でも、直接大臣にまで進言して解決を求めることができます。

## 女性ももっと自由に

私が、夫や子どもをチュニジアに残して、単身で日本に来ることについて、家族は好意的で、私に理解を示してくれました。チュニジアでは、研究や仕事のためにフランス

などヨーロッパの近隣国に単身赴任する女性は珍しくありません。しかし、日本では女性の単身赴任が少ないためか、日本に来てから、そのことについて疑問視するような質問を受けたこともあります。私自身は向上心が強く、目的意識を持って日本に

## 性によって仕事が決まる?

今回の取材を受けることになった時、「男女共同参画」とか「男女差別」という言葉を聞いてとまどいました。なぜなら、イギリスでは男女差別がなく、男女共同参画も当たり前のことで、それらの言葉自体が存在していないからです。「男だから」「女だから」という考え方もありません。ですから、日本で女性が支店長や社長になったりした時、それがニュースになるのがとても不思議です。イギリスではそれは普通のことであって、何も特別なことではないのです。

イギリスは能力主義の国なので、仕事においては学歴も性も関係ありませんし、男女の賃金格差もありません。日本では、職場の中でお茶汲みをしたりコピーをとったりするのは女性の仕事のようにしていますが、イギリスではそういうことは一切ありません。必要な人が自分であるのが当たり前です。会社の人や外部の人に対して、自社の女性社員のことを「うちの女の子」と言うのもおかしいですね。

## 希薄な父親の存在

私たちには子どもがいませんが、今の日本の家庭を見た時、父親の存在がとても希薄だと感じています。子育ては母親に任せっぱなしで、毎日仕事や付き合いで遅く帰宅し、せつかくの休日も、一人で外出したり家でごろごろしていたりして、妻や子どもたちと関わろうとしない父親が多いのではないのでしょうか。

それに比べて、イギリスは家庭の中での父親の存在は大きく、子どものしつけは父親の仕事としてとらえられています。家事も

来ているので、自分のしていることに迷いはありません。しかし、1年間幼い子どもと離れていた時には、親としての責任に悩んだことも事実です。夫は、そういう私をよく理解し、日本での私の生活を応援してくれています。

女の仕事とは決まっています。その時々で手のあいている者がすればいいのです。夫(父親)にとって一番大切なのは家族で、仕事はその家族のためにしているのであって、仕事のために家族が犠牲になることなどありません。休日は家族で過ごすのが当たり前で、夏と冬にはそれぞれ10日間から2週間の家族旅行もします。日本では、夫と旅行に行くより気の合う友人と出かける方がいいという妻が結構いるようですが、それだけ、夫の存在が希薄かあるいは負担にさえなっているのかもしれないね。

## 対等な立場で共に歩む

私たち夫婦は、お互いの存在を対等な立場で人生を共に歩んでいくパートナーとしてとらえています。ですから二人で過ごす時間はとても大切に、いつも二人でいるのが当たり前という感覚です。しかし、私たちはそれぞれピーター・バーデンとバーデン京子(京子さんには日本人として姓が先というこだわりがあります)という存在であって、バーデンさんとバーデンさんの奥さんというとらえ方は嫌ですね。



ピーター・バーデンさん(36才)とバーデン京子さん(36才)ご夫妻

ピーターさんはイギリス出身。1988年、企業の英会話講師として来日。翌年、京子さんと結婚。現在、ピーターさんは岡山商科大学助教授として学生の指導にあたり、京子さんは通訳や英会話講師として活躍している。



研究室に貼ってあるバーデンさんの似顔絵



クリストファー・クレイトンさん(37才)

6年前に高校の英語教員としてカナダより来日。1998年に美奈子さんと結婚。昨年3月に長男誕生。現在岡山大学教育学部講師。

### 学校の名簿で「男子が先、女子が後？」

来日して驚いたことが何点かあります。最初にびっくりしたのは高校の出席名簿で「男子が先、女子が後」になっていることでした。なぜなら、カナダでは、こういう名簿は全て「男女混合でアルファベット順」になっているからです。それに、男女の賃金格差があること、新幹線の女性運転士誕生をマスコミで大きく取り上げたことなどもカナダでは考えられません。日本は、「男性は、また女性はこうであるべき」と言う考え方が強いと感じました。また、「家内」「嫁」「主人」などの言葉が使われているのも理解できません。文字の意味から考えて、こういう言葉を使うのはおかしいのではないかと思います。

日本はカナダより早く(カナダは'82年)、憲法で男女平等を決めたのに、実際の社会ではそうなっていないようです。社会的なことを見てみると、日本の女性は権利を使っていないと思います。以前、女子大生に将来何になりたいかを質問した時、「主婦」になりたいという答えが多く、自分の将来の選択に安易さも感じられました。

### 不思議に思う“OL”の存在

台湾大学を卒業して日本に留学し、最初に驚いたのは、大学院の研究室で、別の研究室の先生から「君は(女の子だから)お茶を入れてきなさい。」と言われたことです。もちろん、私はお茶を入れる理由などありませんから、知らん顔をしていました。

日本は経済面では進んでいるようですが、男女平等、男女共同参画の面では、遅れていると思います。台湾では、日本に比べて管理職につく女性も多いし、女性だからというハンディは感じられません。男女は昇進や昇給、教育訓練の機会も平等で、能力さえあれば、女性でも正当な評価が得られます。私がとても不思議なのは、日

### 夫婦は大切なパートナー

我が家では、夫婦はお互いにとっての大切なパートナーです。家事は手が空いているほうがするという考えで、家事の役割分担より、夫婦が将来のことを共に考えて話し合っていることの方が大切だと思っています。言葉や文化の違いで困ることもありますが、話し合っていく中でどうすれば良いかを見つけています。

日本はとても素晴らしい国だと思います。しかしそれに甘えてはいけなく、まだ改善されなければいけないこともあり、特に男女平等に関してはまだまだ問題が残っていると思います。ところで、今は子どもと一緒に風呂に入るという、カナダには無い習慣を楽しんでいます。



研究室には家族の写真が貼ってあります。

本には“OL”という、男性の補助的な仕事をする女性がたくさんいることです。大学で専門的な教育を受け、自分で発案、企画し、遂行していく能力を持ちながら、それをしないのはとてももったいないと思います。

### 夫婦別姓の方が合理的

研究室の先輩でもある夫は、進歩的で、家事や育児にも大変協力的です。日本で時々問題になる母親の幼児虐待などは、父親の育児不参加、無関心も原因なのではないでしょうか。ただ日本で結婚して「三野」姓を名のようにになった時には、抵抗がありました。台湾では、女性は結婚後もずっと旧姓を名ります。ですから私は結婚して自分の旧姓である「李」を名

機会が全くなくなった時、自分が消えてしまったような喪失感を味わいました。台湾では、子どもは一般的には父親の姓を名りますが、話し合いにより母親の姓を名めることもできます。離婚した場合などを考えても、夫婦別姓の方が合理的なのではないでしょうか？

### カギ握るのは家庭教育

現在の私の職業は“専業主婦”です。台湾で高等教育を受け、日本に留学して研究を続け、せっかく専門的な知識を身につけたのに、それを生かしていないと感じることはありますが、家庭の管理や子どもの

### めずらしくない男性の育児

私は岡山にいた時には普段の家事育児は妻に任せきりでした。ところが妻の切迫早産と出産に伴う入院と自宅療養のため、子どもたちをプレスクール(幼稚園)へ預け、その送り迎えをしなければならなくなりました。普通は午前中までですが、一人一日31ドル出せば、朝7時半から夕方5時半まで預かってくれます。保育料が高いのには閉口しますが、まる1日預かってくれるので、仕事の行き帰りに立ち寄れば、送迎は難しいことはありません。父親の送り迎えというと、当初なんとなく気恥ずかしかったのですが、他の父親たちの姿をたびたび目にするので特別珍しいことでもないようです。(父子家庭がどのくらいあ



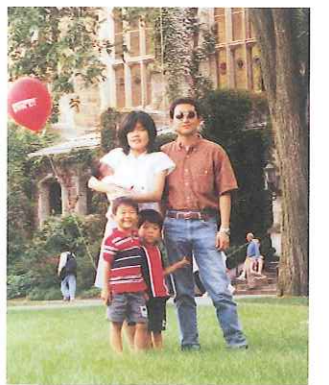
▲アメリカのスーパーや公共施設の男性用トイレに備え付けられているダイパーデッキ。最近では日本でも見かけるようになりました。

教育に専念する“主婦”という職業は、多岐にわたる能力を必要とする、創造的でやりがいのある仕事です。それに、私は男女平等の問題のカギを握るのは私たち“お母さん”ひとりひとりだと思っています。まず女性が自分の家庭の中で、自分の子どもを平等に育てるべきです。男の子と女の子とでしつけ方が違うのはおかしいと思います。幼い頃から男女の区別なく平等に育てられた子どもたちは、性別役割分担意識にとらわれることなく、自然に男女平等感覚が身についています。その意味で私は夫の母にはとても感謝しています。

るのかはわかりません) アメリカ人の父親が送ってきた3歳くらいの女の子をひよいと抱き上げて「I love you, bye!」とか言いながら、キスしているのを見るたび、うちではとてもこうはいかないあと苦笑してしまいますが、それらがとても自然な当たり前の光景になっています。出産後の退院前集団指導には、前日出産してその日退院する7組の母子全てに夫君が付き添っており、熱心に質問したりメモを取ったりする人もありました。スーパーや公共施設の男性用トイレにもダイパーデッキという乳幼児のオムツを替える台が普通に備え付けてあるのを見かけます。こんなところにも育児は男性もするのが当然という意識があらわれているようです。



▲台湾・高雄の中興塔



小森 栄作さん(34才)

2000年4月より岡山大学第二外科から米国ミシガン大学へ研究員として留学中。家族構成は夫婦、長男、次男、そして現地で長女の出産を経験。



三野 璧如さん(45才)

台湾大学卒業後1977年4月来日。大阪立大学大学院(農学部遺伝育種学研究室)留学。同じ研究室で知り合った三野真布(まさのぶ)さんと結婚し現在の国籍は日本。家族は夫と子ども二人。(中2と小6の女の子)

# 国連特別総会 女性2000年会議

女と男が対等な社会づくりをめざして、6月5日から6月10日までニューヨークの国連本部で、国連特別総会「女性2000年会議：21世紀に向けての男女平等・開発・平和」が開かれました。200近い国と地域から政府関係者、NGO（非政府組織）ら多くの人々が集まりました。

1995年に北京で開かれた第4回世界女性会議「北京会議」で採択された「北京行動綱領」がどれだけ達成されたか、達成されていないのならそれを阻む要因は何かを点検するなど、さらなる前進を図るのが、今回のニューヨーク会議の目標でした。この会議では、各国政府がとるべき行動目標を盛り込んだ「政治宣言」と「成果文書」が採択され、家庭内暴力、夫によるレイプなど「女性への暴力」の根絶、家事・育児への男性の関与強化などが盛り込まれました。さまざまな女性への暴力を無くしていくという目標が入ったこと、そして男女が共同で育児、家事の責任を負い、果たすための育児サービスや「親休暇」の充実など、「家族にやさしい」政策づくりが盛り込まれたことの意義は大きいと言われています。

この会議のNGO企画のシンポジウムに出席され、自らワークショップ（研究集会）も開かれた、世界女性会議岡山連絡会コーディネーターの時實達枝さんに聞きました。



時實 達枝さん

## どのようなことを報告されたのですか。

私たちは、「女性2000年会議」プロジェクトチームで約1年かけて日本国内の学校教育、生涯教育、男女共同参画推進状況の調査を実施しました。そして北京行動綱領「女性の教育と訓練」について戦略目標別に、日本政府が取り組んだこと（成果）、障害、取り組むべきこと（課題・方策）に分析し、「日本政府の成績表」としてまとめ、「氷の壁をのりこえよう—ライフサイクルの中の教育を考える—」として、日本の現状を報告しました。



ワークショップ

高い進学率、レベルの高い教育を多くの女性が受けているにもかかわらず、政治的、経済的に重要な意志決定の場に参画する

女性の数が極めて少ない。それも教育・保健福祉・男女共同参画・環境などの分野に集中しているという現状。これは日本に特徴的で、外国からだけではなく日本の女性にとっても、見えない「氷の壁」となっています。そこでこの「氷の壁」を乗り越える方法を提案しました。

## その「氷の壁」とはたとえばどんなことですか？

いろいろありますが、まず、積極的に女性を登用するというより、「女性でもこれくらいなら出来るだろう」という女性に対する認識の低さや、それを支えている固定的な性別役割分担意識、これがなかなか解消されず、家庭や地域、学校教育のなかで再生産されている傾向があります。また縦割り行政が障害になり、女性の施策遂行を効率的に実施できず、女性の能力開発の機会を奪い、女性を低賃金で雇用し不安定な雇用を固定化し、女性の社会的・経済的自立を阻止していることもあります。

## そのような壁に阻まれ、では岡山の女性が「エンパワー」するとして、その最初の一歩はなんでしょう？

家庭の中で対等であるよう努力すること。夫や家族がプレーキをかけても頑張りあきらめさせる。(笑)

## ところで、時實さんが出席されたシンポジウムの中で「経済のグローバル化・政治のグローバル化のために女性や子どもが悲惨な状況に追い込まれている」ことが印象に残ったとおききましたのですが、それはどういうことですか。

米国のNGOの報告によると、開発途上国への開発援助の中で、女性や子どもの教育分野への予算配分がまだまだ少ないため、女性や子どもは教育や職業訓練を受けられず自立を妨げられているというようにあるようです。そうであれば援助は悲惨な状況が全く救えていないということになります。日本からの多額な援助は我々の税金です。この問題は私たちの生活とつながっているのです。女性には教育も訓練も閉鎖し生産の道具という状況に追い込んでいる国がまだまだあるようです。

## これからの課題は？

新しい課題として、経済・政治のグローバル化による、女性の貧困が拡大されていることに加えて、情報の貧困が加わっているということです。情報格差が広がっていくということです。機器が買えないのでインターネットもEメールもできず、情報が得られないということです。

## 最後にこのような女性の問題を意識され、活動する生き方をされるようになったきっかけは何ですか。

女の子ばかりのきょうだいの真中で育ち、家族から「男の子だったらよかったのに」と言われたり、小学生のころから学校でも社会の中でも何となく女だから低く扱われているのではという「居心地の悪さ」を感じ、大学に入っても、女子大だったため、ますますはっきりそれが見えてきた…そんな漠然としたことが始まりです。

夫をあきらめさせて(笑)、このごろ家事は自分でしてくれるようになったかな(笑)。

# さんかく社会のパイオニア

vol.1



今号からシリーズで、ジェンダーをこえて各界で活躍している人を紹介していきます。

今回は、岡山市初の男性幼稚園教諭、田中修敬（たなかおさのり）さんをインタビュー。田中さんは、兵庫教育大学学校教育学部（初等教育教員養成課程 幼児教育専修）を卒業後、今年から岡山市立高島幼稚園教諭として勤務しています。

「六つ年の離れた弟の面倒をいつもみていたせいでしょか、小学生の頃から小さい子どもが大好きでした。」という田中修敬さん。小学校を卒業する頃には「子どもと関わる仕事がしたい」という明確な「将来の夢」を抱いていたという。そしてその「夢」は中学、高校と進んでも一貫して変わらなかった。周囲の友人や担任教師らが田中さんの「幼稚園教諭志望」を支持してくれる中、田中さんの「夢」は強い「意志」に変わっていった。

「そこにいるだけで安心できる温かみのある先生」を目指す。そのために「格好をつけず「自分らしさ」を出していきたい」と思っている。男性だから幼稚園の中で「父親的な役割を果たそう」という緊張や気負いは全くない。田中さん自身が何度か口にした「自然体」という言葉がピッタリ。「力仕事や大工仕事を田中先生に特にお願いしたことはありません。」と大野鈴子園長先生。「田中先生よりスポーツや土遊びが得意な女の先生もいるし、「厳しさ」という点でも同様。むしろ田中先生は一番優しい先生



百間川での魚取り

じゃないでしょうか。」

終始、笑顔を決やさない。物腰のやわらかさ、丁寧な言葉遣いと優しい口調。園児がなついてくるだけではなく、送迎するお母さん達が

い長話をしてしまうというもうなずける。

岡山市初めての男性幼稚園教諭を迎えるにあたって、園長先生は「はじめは『男の先生がくる』というのでこちら緊張しましたし、職員間にも不安がありました。でも、実際受け入れてみて職員の中でも、保護者間でも、もちろん園児との関係においても、問題になることは何もありませんでした。私も一緒に仕事をしていた何の違和感もありません。」と話す。また「あるお父さんは『田中先生はいいセンスをしておられますね。』と言われま

した。園の行事にいつも積極的に参加して下さる方で、田中先生のこともよく見ておられたのでしょう。幼稚園教諭としてのセンスの良さ、これは持って生まれたもので、男女の性差には全く関係のない個人の資質だと思います。」

1学期を終えての印象深い出来事は、親子参加の百間川での魚取りだったとか。魚取りにすっかり自分の方が夢中になってしまった。子どもと一緒に体験ができることが何より嬉しい。「つらかったことは？」の問いには即座に「ありません。それを感じる余裕もありませんでした。」の答え。反対に幼稚園教諭としての醍醐味を「絵本などを読んであげるときの生き生きとした嬉しそうな顔や、降園時に握手して『明日またね』と言ってにっこりする表情を見るとき。夏休みに入る前に子どもから『早くまた幼稚園にきたい』と言われたとき。」と話す。

もちろん田中さん自身、職場に「もう一人ぐらい男性教諭がいれば。」と思うこともある。だから自分に続けてくれる男性を心待ちにしている。「大切なのは純粋に子どもを思う気持ちと、一歩踏み込む勇氣」と先駆者として強調する。「これから余裕ができれば、自分で絵本を作って子どもたちに読み聞かせたい。自分の歌をギターを弾きながら子どもたちと一緒に歌いたい。」と少しはにかみながらも目を輝かせる田中さん。完全に男女の枠を越えた一人の若い前途有為の幼稚園教諭である。



園庭で子どもたちと

夢は自作の絵本や歌を子どもたちとついでに楽しむ

# さんかく岡山



平成12年4月にオープンして、約5か月を迎えた「さんかく岡山」。  
明るく親しみやすい雰囲気の中、男女共同参画社会の実現をめざして職員一同がんばっています。どうぞお気軽にお越しください。

## 岡山市男女共同参画大学 「さんかくカレッジ」スタート

男女共同参画社会の実現をめざして男女30名の受講生が参加しています。毎回熱気あふれる講座が会議室でくりひろげられています。



●元気な子どもたちにぎやかな託児室



●コーヒーを飲みながらゆったり...交流サロン



●専用の出入口がありプライバシーに配慮した相談室



●専門書から気軽に読める本まで、貸し出しもできます。インターネットでの情報検索は時には順番待ちになるほど。

## さんかく岡山のホームページができました!▶



会議室やミーティングルームの予約もできます。

ぜひ一度ご覧ください。 <http://www.city.okayama.okayama.jp/soumu/danjo/center/>  
岡山市表町三丁目14番1-201号(アークスクエア表町2F) TEL227-2525

男女共同参画社会の  
実現をめざす情報誌  
DUO デュオ 第19号 発行/岡山市総務局市民生活部男女共同参画課  
<http://www.city.okayama.okayama.jp/soumu/danjo/>  
e-mail: danjo@city.okayama.okayama.jp

〒700 8544 岡山市大供一丁目1番1号 ☎086(803)1000 (内線3531)

### INFORMATION

## 事務局からのお知らせ

今号から編集委員がかわりました!  
男性2名、女性3名の新メンバーでこれからの4号を担当していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

#### 編集委員

宇野寛三 河田幸男  
柴原佳子 円山裕子  
脇本知子

### DUO vol.19

## 編集後記



事務局 Y

今回のテーマ「外国から見た日本の社会・日本の家族」いかがでしたか。今回ご協力いただいた外国の方のお話は、必ずしもその国のすべての人にあてはまることではないかもしれませんが、読んでいただき、これまであたりまえと思っていたことに新しい発見をいただけたらと思います。

新しい編集委員になってはじめてのDUOです。新委員が真剣に取り組んでくださる姿勢に、こちらも気持ちがひきまします。力を合わせて楽しくDUOを作っていきたいと思っています。